釜ヶ崎へ、そして釜ヶ崎から！

現在社会の苦境を釜ヶ崎の現実からとらえ返す

2002 年 4 月 27 日土曜日

1　「問題」の可視化

1990 年代に入ってから、とりわけ、いわゆる「バブル経済崩壊」後の 1993 年頃から、大阪や東京をはじめとする日本の大都市で「野宿者」（現在のマスコミ報道では一般に「ホームレス」と呼ばれている）が急激に増加し、その存在が各種メディアによって大々的に報道され始めて、いわゆる「ホームレス問題」が大きな社会問題として浮上してきた。「豊かな社会」であるはずの現在の私たちの社会に「突如」出現した（と語られることが多い）この「むき出しの」貧困と人間的悲惨の現実は、行政関係者や研究者に対して少なからざる「ショック」を与えたと思われる。以後、この「ホームレス問題」への対応を巡って、国・地方の行政諸機関や民間諸団体のさまざまな活動が展開され、そうした動きは現在もなお加速しつつある。また、社会学や社会福祉学、社会政策学、労働問題研究といったさまざまの学問領域の研究者による「ホームレス研究」や、問題の実態と原因を探るための各種調査も試みられている。総じて言えば、今や「ホームレス問題」は、近年の経済状況の悪化という社会的文脈に埋め込まれつつ、現代日本の、とりわけ都市社会の、主要な社会問題の一つとして「公認」されたと見なしてまちがいないであろう。

他方で、このホームレスの存在を巡っては、各都市、各地域でさまざまの「事件」や地域的トラブルが発生し、大小の社会的緊張や葛藤の源泉となっており、その意味では「ホームレス問題」はただたんにマクロ社会の位相で「問題化」しているだけではなく、むしろそれ以上に、都市住民の日常的な生活空間において、すなわちその「身近な」ところで「問題化」しつつあるといえる。さらには、こうした事件やトラブルをも含めて、ホームレスの存在は「ワイドショー的関心」の対象ともなって人々の耳目を集め、あるときは「あなたも明日はホームレス」といった危機煽り的メッセージの媒体となり、またあるときはテレビドラマやコミックス、ホームレス・ルポ等々を介して大衆的娯楽の素材となる、といった現象も見られる。その意味で、今や「ホームレス問題」は、少なくとも大都市の住民にとっては、「身近な問題」として意識され関心されているといえるだろう。

2　隠蔽される現実

このような都市における野宿者とその存在の幾分か過剰とも思える社会的な可視化と問題化は、たしかに一方では問題的現実の所在を明らかにし、人々の関心をそこへと誘導し、そして「問題解決」へ向けての社会的体勢を準備するという点において、「ホームレス問題」解決のための不可避的かつ不可欠の社会的過程であるともいえるのであるが、しかし同時に、こうした可視化と問題化の過程で、それによってむしろ隠蔽され見えなくなってしまう（あるいは見えにくくなってしま

う）現実もまたある、ということが忘れられてはならないだろう。過剰な「情報」がかえって現実を曖昧化し、中立的・客観的で懇切丁寧な解説が問題の本当のコンテキストを見えなくさせてしまうこともある。意図的な隠蔽や歪曲もないとはいえない。いずれにしても、「ホームレス問題」情報の豊富化と行政的あるいは社会運動的な問題関与の増大が、必ずしも自動的に問題の本質の把握と理解を深めるわけではないのである。

私たちはたとえばマスコミ報道等を通じて、現代日本の厳しい経済状況（不況、倒産、リストラ）、現代都市社会の退廃と病理、不運な人々の「転落のドラマ」等々、さまざまな「物語」を現在の「ホームレス問題」のうちに「読む」ことが可能なのだが、そしてそうした「読み」がまったくの的はずれであるわけでは決してないのだが、それでもそうした「物語（＝ドラマ化）」には理論的に（そしておそらくは倫理的にも）根本的な誤りがあると思われる。その誤りを一言でいうならば、それは問題の「当事者の不在」、あるいは問題の「現場の消失」である。この間の一連の「ホームレス問題の社会的な構成」の過程において、ほとんど注目されることなく無視され続けたものは何かといえば、それは他ならぬ野宿者自身であるという皮肉がある。たとえば、頻発する野宿者への少年たちによる襲撃・暴行事件の報道や解説において、つねに注目されるのは加害者である少年たちであり、被害者である野宿者の存在は、その困難な状況を含めて、ほとんど無視されてきた。また、ホームレスの増加が「不況のあおり」として「一般的に」語られることはあっても、「なぜ不況が野宿へと直結するのか」、「不況によって野宿へと追い込まれているのは誰か」といった本質的な問題が、野宿者の職業遍歴やその階層規定の具体に即して探られることはほとんどない。また野宿者「支援」の行政施策やボランティア活動が展開される場合にも、当事者であるはずの野宿者が発言する機会はほとんどなく、彼らはもっぱら「支援の対象」にとどめられてしまっている。すなわち、現在の「ホームレス問題」は、問題の当事者である（はずの）野宿者と彼らの「問題の現場」をほとんど無視して成り立っているのである。

3　問題を「寄せ場」から見る

野宿を強いられている人々の現場に可能な限り接近し、その「場所」[1]から、現在の「ホームレス問題」をとらえ直すことが必要である。そして、そのような問題の再構成のための一つの特権的な「場所」あるいは「現場」が「寄せ場」（具体的には大阪の「釜ヶ崎」）である。寄せ場（釜ヶ崎）の現状とそこで生活している（生活していた）寄せ場労働者の困難な状況を抜きにして「ホームレス問題」を語ることは不可能であるはずにもかかわらず（少なくともここ大阪においてはそうである）、実際には、それらを無視した「ホームレス物語」が広く流布されている。

現在、公園や商店街、ビルの軒下、高速道路の高架下、河川敷といったさまざまの都市の「隙間」で厳しい野宿生活を送っている人々の、その「流動」の行程を「逆に」たどっていくならば、その多くは「寄せ場」に行き着く。少なくとも大阪の野宿者においてはそうである。そしてその寄せ場（釜ヶ崎）もまた、現在は、多くの野宿者（失業した寄せ場の日雇労働者）の過酷な生存の場である。この「寄せ場」から野宿へと至る行程の終点に都市大阪の多くの野宿者は存在し、そしてさらにその先には無惨な「行旅死亡」がある、といったおおまかな見取り図を描くことができる。基本的にはこのような視点を欠落させた「ホームレス問題」論は、根本的なところで誤っていると言わざるを得ない。

それゆえ、議論の主題は、まず第一に「寄せ場」とそこで生きる人々に設定されなければならな

[1]ここでの「場所」とは岩田正美が「生きていく場所」と呼んだ、そのような「場所」である（岩田正美「ホームレス／現代社会／福祉国家」、2000 年、明石書店、P.13-）。

い。そして、寄せ場という社会空間あるいは「場所」を、その構成員の「結節空間」[2] として包み込みつつ、さらに広範に拡がるもうひとつの「場所」である「都市下層」[3]、これが第二の主題となるだろう。密接に結びつき、相互に交流し合いつつ、しかし同時に相対的に区別されたものとしてもあったこの二つの「場所」が、現在、その様相・機能・意味（すなわちその社会的位置付け）を大きく変えようとしている。そして、この寄せ場と都市下層の「変容」を象徴するものが、都市における「野宿者（ホームレス）」であり、その急激な増加と社会的な可視化（都市中枢部における「野宿空間」[4]の成立と拡大）という現実である。それゆえ、この「都市の野宿者」が第三の主題として設定される。

都市下層、寄せ場、都市の野宿空間という三つの重層化された「場所」の相互連関のありようは、1990 年代に入ってから大きく変容した。そして、この変容過程の最も見えやすい「一つの」帰結が都市における「野宿空間」の形成と拡大（すなわち寄せ場の日雇労働者を中核とする都市の下層労働者・不安定就労者の都市中心部における「野宿生活者」としての長期停滞化と独自の生活空間・生活様式の形成）である。それゆえ、「ホームレス問題」は、少なくともここ大阪では（そしておそらくは東京や横浜、名古屋などにおいても）、寄せ場（釜ヶ崎）とその背後に広がる都市下層・不安定就労者層総体の状況と切り離して（たとえば都市の社会病理といった具合に）論じることは誤りである。

4　寄せ場とは？

「寄せ場とは何か」あるいは「寄せ場とは何処か」、この問いに対する十分な答えを踏まえてはじめて、議論と分析はさらに先へと進むことができるのではあろうが、しかし、この問いに答えることはそれほど容易なことではない。寄せ場もまた人びとの「生きる場所」であり、そこに生きる人びとの労働、生活、文化、等々の営みが関わって複雑・多面的であり、生半可な「定義」を許さない。ここでは、議論に必要な範囲での、そのミニマムな定義を与えるとすれば、それは①「労働市場」としての寄せ場②「単身日雇労働者の密集居住空間あるいは生活空間」としての寄せ場③ 流動する都市下層労働者の「寄り場」あるいは「溜まり場」としての寄せ場④ 隔離された「被差別空間」としての寄せ場、という四重の規定性を含むであろう。

①については、たとえば牛草英晴によって次のような簡潔な規定がなされている。

> 現代日本における『寄せ場』とは何か。現代日本における雇用関係は、常雇的雇用関係（慣行としての終身雇用が中心）と、それ以外の臨時的・日雇的雇用がある。このうち日雇労働力が日常的・集中的に取り引きされている場所を「寄せ場」という。言い換えれば、日雇労働力の自由市場・青空労働市場が「寄せ場」ということになる。ただ、この「寄せ場」を中心とする地域全体を指して、「寄せ場社会」あるいは単に「寄せ場」という言い方もされている。…[5]

すなわち、寄せ場は常雇的雇用関係から排除された人々（の一部である日雇労働者）のための労働市場であり、また国内労働市場の「最底辺」に位置付けられた労働市場である。同時に、寄せ場

[2]青木秀男、『現代日本の都市下層』、2000、明石書店、P.14

[3]都市下層という範疇は形式的にはその内部に寄せ場（の労働者）をも含みこんだ広義の範疇である。それゆえ、寄せ場と都市下層を並列させることは、論理的には正確ではない。しかし同時に、寄せ場は都市下層「一般」には還元してしまうことのできない固有の空間的境界、メンバーシップそして社会的機能、さらには歴史をも有している。ここでは寄せ場を単に都市下層の一構成部分としてではなく、その固有性を重く見て、独立の範疇としてとらえたい。

[4]青木秀男、『現代日本の都市下層』、2000、明石書店、P.20

[5]牛草英晴、1993、P.126

は一つの巨大な「労務管理機構」でもあり、そこにおいては、日常的に労働力の選別と淘汰が行なわれている。こうした労務管理の一端を担っているのが人夫出し業者であり手配師である。寄せ場をまさしく寄せ場たらしめているもの、それゆえ寄せ場を「古典的スラム」から分かつもの、それが寄せ場の底辺労働市場としての機能である。

②については、たとえば岩田正美は「その日その日の労働需要に応じて『現場』に出向いていく日雇労働に見合った特異な居住形態＝簡易宿泊所（ドヤ）の密集する地域であり、この『ドヤ』を拠点とした日雇労働者の消費生活が繰り広げられる場」[6]と述べている。単身男性の日雇労働者が、その労働力を再生産するために必要な「施設」の密集地帯である。すなわち「寄せ場は、『ドヤ』を中核として酒場、めし屋、古着屋、質屋、遊び場等が集まった、都市内の一区画である」[7]。

③は寄せ場労働力の「給源」あるいは、寄せ場労働者の階級・階層的基盤に関わっている。寄せ場は労働力の消費あるいは濫費の場であって、それ自身で労働力を再生産することはできない（寄せ場は「男性」日雇労働者の密集居住地区である）。それゆえ、寄せ場が存続しうるためには、不断に「外部」から労働力を吸引し補充しなければならない。では、その労働力は「どこから」調達されるのか。それは、「すべての不安定＝貧困階層から絶えず排出、沈降する人達によって補充」[8]されるのである。さまざまの地域や産業分野において「過剰化」された人々（すなわち失業者）が仕事を求めて流動し、そうした流動の途中で、あるいはその終着点としてたどり着く場所、それが寄せ場である。これを簡潔に表現すれば「流動的下層労働者の巨大な中継基地」[9] と言えよう。

④については、たとえば 1966 年に国に対して大阪府知事（左藤義詮）と大阪市長（中馬馨）の連名で提出された「スラム対策に関する要望書」[10]の中の次のような表現を見ればあきらかであろう。

> 昭和 36 年 8 月、第一回の釜ヶ崎事件発生以来、政府におかれては勿論、府・市は関係機関相協力のもとに同地区の民生・労働および治安の面について鋭意対策を講じて参ったところでありますが、今回の暴動事件を見ましたことは誠に遺憾に存じております。
>
> ひるがえって、この遠因を考えてみますと、当該地区は浮浪者、刑余者など社会的落伍者の全国的なふきだまりとして一般社会から孤立した特殊な地域を形成し常に犯罪的温床の環境にあることであります。…

このような差別のまなざしと、そこに蓄積された労働力を徹底的に利用しつくそうとする資本の欲望が交差するその点に、寄せ場は存在している。

5　寄せ場＝釜ヶ崎の「変容」あるいは「衰退」？

1990 年代に入ってからの釜ヶ崎における求人数の急激な減少が、多数の地区内居住日雇労働者の長期失業とその「野宿者」化をもたらしたということはおそらく確かである。たとえば、福原宏幸と中山徹は「近年、建設業の日雇労働需要は大きく冷え込み、日雇労働者の失業が一層深刻化している。我が国最大の日雇労働市場である大阪・釜ヶ崎地域（あいりん地域）では、十分な就労機会がなく、所得が底をついたために簡易宿所（「ドヤ」）に宿泊できない日雇労働者達が、野宿生活を余儀なくされている。とくに高齢日雇労働者の野宿化が著しく進んでいる。…」[11]と述べて、釜ヶ崎における求人数の減少が日雇労働者の野宿者化をもたらした原因であると主張している。こ

[6]岩田正美、1996、P.137
[7]青木秀男、1989、P.41
[8]西岡幸泰、1979、p.58
[9]「やられたらやりかえせ」釜共闘・山谷現闘委・編集委員会、1974、P.13
[10]大阪府労働部、1983、P.264
[11]福原宏幸・中山徹、1999、P.21

うした主張は他の多くの論者によってもなされており、またかなりの程度まで実証的なデータで裏付けられてもおり、いくつかの補足的な留保条件をつけてではあるが、近年における急激な寄せ場（釜ヶ崎）の求人減少と大量の地区内日雇労働者の野宿者化とのあいだの因果関係は否定することのできない事実である、と結論することができるであろう。問題は、この近年の寄せ場における急激かつ大幅な求人数の減少が一体何を意味しているのか、ということであり、あるいは、この求人数の減少という事態の背後で何が進行しているのか、ということである。

たしかに、労働市場としての寄せ場においては、年ごと、季節ごと、月ごと、日ごとの求人（＝就労）数の激しい増減変動はいわば「常態」であり、このことは寄せ場が寄せ場として制度化されて以降の求人数の推移からも容易に見て取れることではある。すなわち、寄せ場における求人（＝就労）の不規則性・不安定性は、労働市場としての寄せ場の存立構造そのもののうちにビルトインされているとも言えるのであり、そしてこのことの不可避的な帰結として、寄せ場労働者の「日常化された野宿（アオカン）」はあるのである。しかしすでに幾人かの論者によって指摘されているように[12]、90 年代以降の寄せ場では、このような従来の「常態」的な求人数の変動（減少）としては説明困難な状況がいくつか出現しており、ここから、現在、寄せ場は何らかの大きな社会構造的な変動に直面しているのではないかといった「疑問」あるいは「危惧」が表明されているのである。

八木正は 1994 年という比較的早い時点で、大規模公共事業の典型とも言うべき、関西新空港の建設過程における「労働力の調達と構成」に関する研究[13]に基づきながら、はたして景気変動だけが釜ヶ崎における野宿者増加の原因なのであろうかという疑問を呈しつつ[14]、次のような重要な指摘をおこなっている[15]。

> ＜バブル経済＞の崩壊による構造不況がいま、その矛盾を順次弱い部分にシワ寄せする形で重層下請けの末端に位置する日雇い労働者たちを直撃し、野宿せざるをえない高齢労働者の激増を招いている。寒空に思いおもいに生活の知恵を働かせて休んでいるその姿は、南大阪の釜ヶ崎地区とその周辺からさらに溢れて、北大阪にまで及んでいるである。これをいつも通りに、単に景気循環に必然的な通常の現象とのみ見るべきか否か、実のところ私は考えこんでしまっている。
>
> というのは私は現在、労働者を含む研究仲間と共に、「関西国際空港建設労働調査」に取り組みつつあるのだが、その過程で、巨大建設プロジェクトの労働力調達方法に

[12]たとえば、八木正（1994・1997）、松繁逸夫（1997 年）、西澤晃彦（1997 年）、福原宏幸・中山徹（1999 年）、なすび（1999 年）、中根光敏（1999 年）、田巻松雄・山口恵子（2000 年）、青木秀男（2000 年）などの議論を参照。

[13]この共同研究は、その成果の「一部」が『関西国際空港工事に従事した建設労働者の雇用構成に関する試行分析』（島和博・八木正・竹村一夫・本間啓一郎・松繁逸夫、1997）として発表されている。その中には、「釜ヶ崎資料センター」の松繁逸夫による、釜ヶ崎の日雇労働者がどのような形態で関空工事に組み込まれていたのかということについての興味深い分析も含まれており（「釜ヶ崎日雇労働者と関空工事」）、日雇労働市場としての釜ヶ崎の現状について考察する際には参考になる。

[14]同様の問題提起は松繁逸夫によってもなされている。松繁は、1960 年代以降の釜ヶ崎の労働者人口と仕事量の変動の分析を通じて、「人口の増加（約 2 割増）よりも仕事の増加（約 3 倍）のほうが増加規模は桁違いに大きい」にもかかわらず、それゆえ「釜ヶ崎には仕事はある」にもかかわらず、「釜ヶ崎の労働者が野宿している状態」が生まれているという現実に注目すべきことを促している。そして、そうした状態をもたらした要因として、「あいりん地区内でアブレが強まったのは地区外の労働者が地区内の労働者の代わりに釜ヶ崎から就労しているから」ではないかと述べている（松繁逸夫、1997）。すなわち、釜ヶ崎における人口構成の変化、具体的には釜ヶ崎の「周辺部」もしくは「地区外」における新たな労働者層（「直行」層）の蓄積の進行、に規定された「労働者間の仕事の配分」の変化によって、「釜ヶ崎には仕事はあるのに、釜ヶ崎の労働者が野宿している状態」がもたらされているのではないかと主張しているのである。先に述べた、釜ヶ崎における階層構造という視点から、この松繁の主張をとらえかえすならば、それは階層間での「仕事の配分」の格差がますます拡大して、釜ヶ崎の「周辺部」に居住する「直行」層の就労が相対的に「安定化」していくのとは対照的に、「地区内」に居住する「本来の日雇い」層の就労状況は厳しくなっているということである。松繁は、いわば労働力の「供給」側としての寄せ場の変容に注目したのであり、それに対して八木は、寄せ場の労働力を「需要」する建設・土木資本の労働力「政策」から、その変容をとらえようとしていると言うことができる。八木と松繁は、どのような個別現象に着目するのかという点では若干異なっているが、両者ともに、単なる景気変動では説明のつかない、労働市場（寄せ場）としての釜ヶ崎の「構造的」な変容に注目しようとしている点では共通しているのである。

[15]八木正、1994、P.6

ある根本的な変化が生じつつあるのではないかと推定される諸事象にぶっつかっているからである。すなわち、従来のような釜ヶ崎での直接求人は影をひそめ、「顔づけ」求人を組織化するような形で選別した日雇い労働者を、「空港島」対岸の地元事務所ないし南大阪の「西成労働福祉センター」登録の事業所に名目的に組み込み、労務・生活管理の徹底をはかっているかのような兆候がうかがえるのである。...

もしも、釜ヶ崎における求人数の急激な落ち込みと、その結果もたらされている多数の地区内労働者の「野宿生活者化」が、八木の言うように、「単に景気循環に必然的な通常の現象」では**ない**とすれば、そこには寄せ場としての釜ヶ崎の存立そのものにかかわる何らかの「構造的変動」が生じているのである。それゆえ、この「構造変動」の中身が具体的に探られる必要がある。

現在の釜ヶ崎は、一方では、野宿（生活）者の一大供給地となり、あるいはその中継基地ともなり、そしてもう一方では、その内部に、高齢の「元」日雇労働者を中心とした、野宿「生活」への移行さえできずに滞留する被救恤層を分厚く抱え込み始めている。すなわち、現在、釜ヶ崎はその労働市場としての機能を徐々に弱めながら、「都市窮民」の巨大な集積地へと変貌しつつあるかに見える。

そして、このような釜ヶ崎の労働市場としての機能の弱体化にもかかわらず、釜ヶ崎への「新規流入」は依然として続いている。1998 年の 7 月 29 日に、大阪市立大学文学部社会学研究室は、「センターの夜間開放」[16] を利用するために集まった労働者（野宿者）887 人を対象に、簡単なアンケート調査を実施した。そのアンケートには調査対象者が「いつ釜ヶ崎へ来たのか」という質問が用意されており、それへの回答結果を集計しグラフ化したものが（図 1）である。

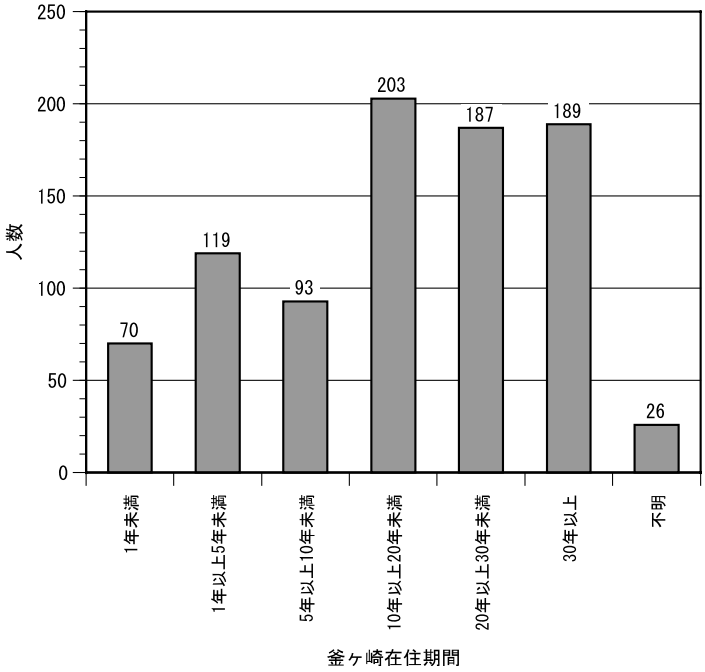

図 1: 釜ヶ崎における在住期間

これによると、この時期、センターで野宿をしている労働者のうち 8 %（70 人）が釜ヶ崎に来

[16]釜ヶ崎地区内における野宿者の急増に「対処」するために、1998 年の 6 月と 7 月の 2ヶ月間、行政によって、センター 1 階の寄り場が野宿場所として開放された。そこでは同時に「水と乾パン」も支給され、連日 700 人から 1,000 人の労働者が利用した。同様の措置が昨年同時期も行われた。

てまだ 1 年もたたない「新規」流入者である。これに、5 年未満の 119 人を加えると、全体の 22 %が最近になって（バブル経済崩壊後に）この釜ヶ崎の地に流入してきた人たちであるということになる。これらの新しく流入してきた人たちは、当然にも、この釜ヶ崎に仕事を求めてやってきたのだと考えられるが、現実には釜ヶ崎に仕事は少なく、建設・土木の日雇労働者としての経験や熟練を積む間もなく、そのまま野宿生活に追い込まれたのだと想像される。しかもさらに注目すべきは、これらの「新規流入」層の流入時の年齢がきわめて高いという事実である。（図 2）は、「流入時期」グループ別に、その流入時の平均年齢を求めてグラフ化したものであるが、釜ヶ崎に来て 1 年未満の人たちの流入時の平均年齢は 52.6 歳、5 年未満のそれは 50.6 歳と、いずれも 50 歳を越えている。

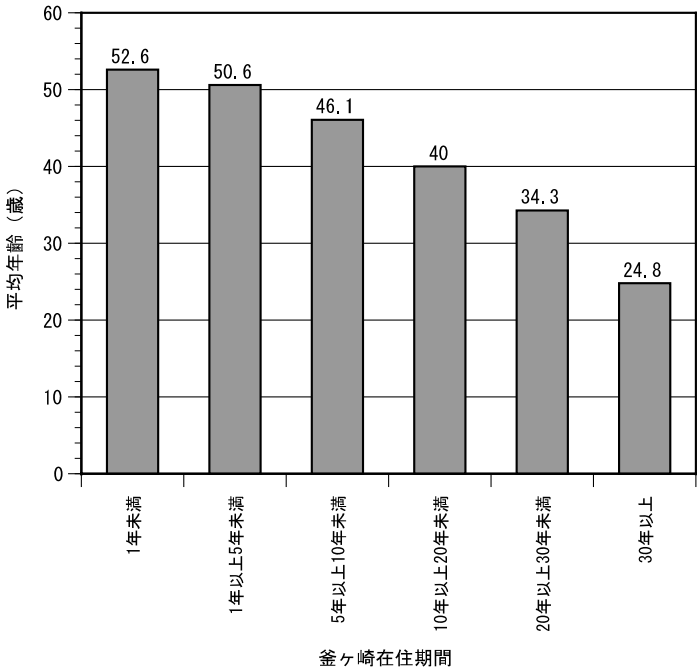

図 2: 釜ヶ崎への流入時の年齢

この釜ヶ崎への中高年齢者層の大量流入という現象は、「あいりん労働公共職業安定所」における「新規求職者」の年齢構成からもうかがえる。職安の速報によれば、1998 年 8 月の新規求職者 153 名の平均年齢は 50.3 歳であると報告されている。すなわち、釜ヶ崎には現在、こうした人々が絶え間なく流入してきているのである。釜ヶ崎そのものが急速に高齢化しつつある状況で、そこにさらに新たな中高年労働者の流入がコンスタントに続いているのである。そして、現在の釜ヶ崎においては、このような中高年齢者が仕事に就ける可能性はきわめて低い。ということは、彼らはこの釜ヶ崎をただ「経由して」野宿生活に入るか、もしくはこの釜ヶ崎で被救恤民として滞留するか、どちらかの途を「選択」せざるを得ない。

岩田正美は寄せ場の高齢化と、その寄せ場への高齢者の追加的流入という事態を、「二つの異なった意味での日雇労働者の高齢化」と呼び、ここに「今日の日雇労働者の高齢化問題の深刻さがある」と述べている[17]。その「深刻さ」とは、寄せ場の高齢日雇労働者の問題が、単に寄せ場の「内部」で完結した問題ではなく、寄せ場の「外」の高齢化した「不安定就労」層の問題と結びついて

[17]岩田正美、1996、P.139

いるというところにある。たしかに問題が可視化する場は寄せ場であるとしても、その問題の広がりは現代日本の「不安定就労」層全体に及んでいるのである。

ここから、私たちは現在の釜ヶ崎が日本の社会全体の中で、どのような位置を占めているのかということを、おぼろげながらも理解することができる。すなわち、釜ヶ崎は「普通の市民社会」の内部で無用化された人々が「最後に」たどり着く場となっているのである。現在、私たちの社会では、「不況」の掛け声とともに、「リストラ」という名の組織的な「人間のスクラップ化」が進行している。釜ヶ崎の背後には、このスクラップ化された大量の人々が控えている。そこから釜ヶ崎へ、不断に無用化された人々が流入し、そして再び都市の中心部へ、野宿生活者として「帰還」しているのである。

高度経済成長期の釜ヶ崎は、その労働市場としての機能によって、大量の「若々しい」労働力を吸引し、さまざまの産業分野にその労働力を提供してきた。しかし現在、かつての吸引力は失われようとしている。それにもかかわらず、「落層」という方向性において「流動化」せしめられた人々の釜ヶ崎への流入は続いている。その意味では、釜ヶ崎は依然として「一般社会」から排除された人々の「寄り付く場所」として存在しているのだということができる。